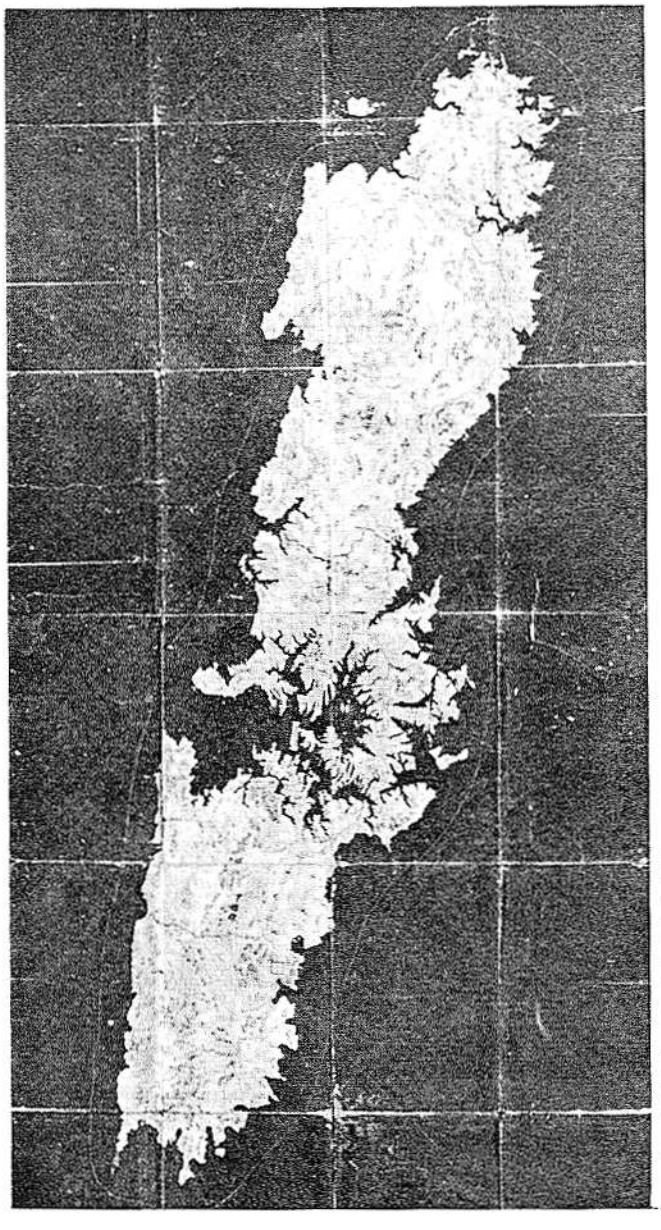
対馬歴史民俗資料館報

第5号
昭和57年3月

編集・発行
長崎県立対馬歴史民俗資料館
対馬厳原町今屋敷
郵便番号 817
電 (09205)－2－3687
印刷所
長崎市栄町6－23
昭和堂印刷
電 (0958) 21－1234



対馬国地図
元禄十三年（一七〇〇）宗家文庫

本館架蔵の元禄古地図について

永留久恵

対馬国
上県郡　五拾七ヶ村
下県郡　六拾七ヶ村
村数合　百弐拾四ヶ村
村高之儀年々増減有之
従前々高不相極候
元禄十三年辰庚歳正月
宗対馬守

と墨書した貼布があり、縦四・七メートル、横一・七メートルで、現在の二万五千分ノ一地図と照合してみて、わずかに誤差がある程度の極めて精度の高い地図で、本図の縮尺が二万五千分の一であることは間違いない。複雑な海岸線の屈曲も正確に測られ、水中の岩礁まで図示されている。ただし山地は等高線でなく、鳥瞰図で描かれている。

元禄一三年は西暦一七〇〇年で、当時これほどの測量術があったとは知らなかった。伊能忠敬の測量隊が対馬に来たのは文化一〇年（一八一三）のことで、それより一一〇余年前に本図は作られている。

これは本州藩士小田平左衛門・箕

原多七の両名が、元禄一〇年より三ケ年にわたって測量し、製図したもので、同一二年に完成、翌一三年、これを幕府に提出した。近世における歴史地理の資料として、本図は貴重な価値をもっている。

中世以来対馬では、古代の郷を郡と改め、豆酘・佐須・与良・仁位・三根・伊奈・佐護・豊崎を八郡と称していたが、元禄一二年に古制に復し、郡を郷と改称したもので、本図には八郷として記載されている。また八郡の時代には、上県・下県の郡名を言わず（上津郡・下津郡の称があったが使用例は少ないし、二重の郡称を避けてきたが、この時から郡称も古名に復し、上県郡・下県郡と定称したもので、本図はそれを明示し郡界も通っている。

また本図に記載された村名の漢字表記が、その後の慣用となり、現在に至っている例が多いことを知る。なおこの時代に新開の村ができたり統廃合で絶えた村もあるが、それらを検索するとき不可欠の参考資料でもある。その他船改番所や遠見番所などの位置がわかり、神社・寺院なども記されていて、郷土史の研究に重宝がられる。

この地図の製作と同時期に、「津島紀略」が著述された。本書は陶山訥庵の撰で、元禄一二年の序文があり、乾（地理）・坤（歴史）二巻になっているが、この地理編の地名・用字が元禄地図と同一で、両者の間に意見の統一が読みとれる。おそらく地名に関しては、訥庵の指導があったにちがいない。

対馬の郷土誌として「津島紀事」〈文化八年・平山東山撰〉はよく知られているが、その「津島紀事」の底本とされている「津島紀略」を、私は対馬学の基本としている。その「津島紀略」の乾巻（地理編）を調べる際、この元禄地図を参照できれば、最も効果的なわけである。

本図は幕府に提出した国元控で、同じものが江戸藩邸にもあったことは考えられるが、それ以外に複製があったことはわからない。

数年前、某古本屋の案内に、本図と同じものが出ていることを知らされた。そして一昨年、たまたまその地図を入手したという大阪の地理の先生と会い、「もし貴館に有用ならば譲ってもよいが」という話まであったが、本館には購入予算がないので、どうにもならないとお断りせざるをえなかった。

それからまたしばらくして、韓国の人が来館し、「対馬の古地図を持っているが、いかがですか」ということで、どこから出たものかを尋ねたら、韓国で入手したといわれる。韓国に対馬の古地図があるものかと疑ってもみたが、しかし対馬にも古い「朝鮮国八道地図」があったのだから、一概に否定はできないわけで、とにかく見せてもらったところ、本館の物より一周り小さく、五万分ノ一程のスケールで、似てはいるが同じではなかった。それでも値段は相当のもので、これまた丁重にお断りしたしだい。

島内にもこの元禄地図をもとにして、手書で複製した地図があり、それをまた複刻して学校などに出回っているが、これは近世資料として得難いものがあるからである。

ここで「朝鮮国八道地図」について一言ふれておきたい。これは天和三年（一六八三）の宗家御文庫目録に載っているもので、一七世紀（あるいはそれ以前）に朝鮮で作られたものと見られる（宗家文庫には、朝鮮本・中国本が多いので、不審ではない）。

ところがこの朝鮮地図が、現在同文庫にはなく、いつの頃にか散逸したらしい。それと断定はできないが先年、福岡県文化会館で催された「対馬の美術」展に、朝鮮八道地図が出陳された。その出品目録には、本図は対馬の旧家に伝えられたもので、これと同形態のものが内閣文庫と韓国国史編纂委員会にある。朝鮮では文禄慶長以後地図類の日本への流出を厳禁していたが、それでも対馬に伝存して来たことは興味深く、……と説明がある。これを伝えた旧家というのが、宗氏を指したものでないことは確かで、その由来については明かでない。

朝鮮八道の地名と、河川や山脈まで詳しく記載された地図がなぜ、対馬の藩庫にあったのか、それがどうして外部に出たのか、また同地図を伝えた旧家の所伝など、不審なことばかりである。

生物コーナー

ツシマヤマネコなどの収蔵について

津江篤郎

此の度、ツシマヤマネコ、ツシマテン、オジロワシの剝製が当館に収蔵されることになった。新しく自然部門関係コーナーの設置である。

対馬は古い時代大陸と陸続きであったことから動植物は混沌とした生

物相を呈していて、興味深い島として有名をはせてきた。対馬の動物たちは、その大半が九州本土と共通の種類であるが、大陸系のもの、南方系のもの、また対馬特産のものが入り混って生息しているところに大きな特徴がある。長崎県生物学会発行の「対馬の生物」の詳細な研究によれば、ツシマと名のつく動物では獣類が十種、爬虫類が一種、両生類三種、蜘蛛類三種、貝類十二種、昆虫類は七十三種もある。

獣類だけの種類をあげれば、ツシマヒミズ、ツシマアカネズミ、ツシマヒメネズミ、ツシマカヤネズミ、ツシマキクガシラコウモリ、ツシマクロアカコウモリ、ツシマテン、ツシマヤマネコ、ツシマウマ、ツシマジカがあり興味を唆る。対馬の生物はまだまだ今後の調査によって秘められた深い謎が次々と解明されることであろう。

ツシマヤマネコ（国指定天然記念物）　日本では対馬だけに生息する野生猫で、ベンガルヤマネコの亜種である。昔は対馬と朝鮮がつながっていた時移動して来てそのまま住みついた生証人だと考えられている。イエネコより大きく、最も特徴的なのは額から頭上にかけての四本の黒色帯線とこれに接する二本の白帯線である。鼻の横、眼の下にも三、四本の黒線がある。毛色は灰褐色で、それに褐色の斑紋がある。耳の先端は円味をおび、裏は黒く大きな白紋がある。対馬全域に生息し、普通夜間活動によって餌をあさり廻る。イエネコと異り、排便したままで土をかけることをしないので、糞による調査には便利である。貴重な動物であり、今後森林の開発には十分に心して貰いたいものである。

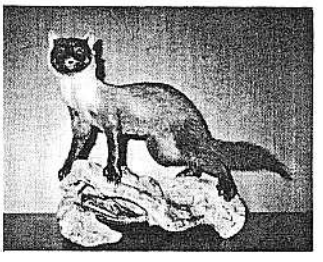
ツシマテン（国指定天然記念物）　朝鮮系のツシマヤマネコに対し、本土系の特産亜種である。島という特殊な環境に隔離されたため進化したもので、学術上貴重な存在である。体毛は夏冬により変化がみられ、夏毛は黒褐色で、冬毛は黄褐色となり頭部は灰色になる。島ではワタボシカブリとよんでいる。全島に広く分布しているが、姿をみることは殆んど出来ない。時に椿の蜜を求めて木に登っている可愛い姿をみたという話を聞くことがある。近頃車にはねられて死亡する例が多い。

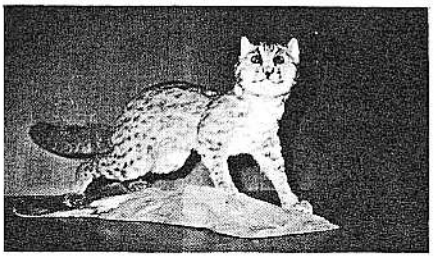
オジロワシ（国指定天然記念物）　この鳥はワシ類の中でも大型の鳥で、魚類や鴨のような中形の鳥類を襲って採餌する。対馬にもイヌワシ、オオワシなどと共に冬鳥として大陸方面から渡って来るが、オジロワシの渡来数が最も多い。上県町の御嶽山中をねぐらとして、その周辺の海岸線や相当広い範囲を飛び廻り生活の場としている。御嶽の「みのどんの滝」は水のみ、水浴の場として知られている。全国的にみて、同一場所に毎年飛来する事例はきわめて少なく、学術研究上貴重な場所で、県では「ワシ類の渡来地」として天然記念物に指定し保護につとめている。

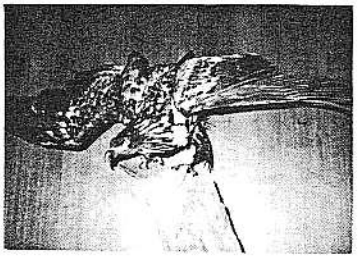
なお本館収蔵のものは幼鳥かとおもわれる。

因に、対馬の鳥類は留鳥二一パーセント、渡り鳥七七パーセントの観察がなされている。

先ごろ、ツシマヤマネコ、ツシマテン、オジロワシの三種ともテレビ班が何回か苦労して撮影に成功し、全国に放映された。


◀ツシマテン


◀ツシマヤマネコ

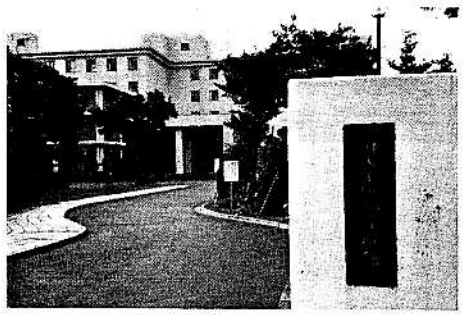

◀オジロワシ

対馬は山ばかりの島である。どの山も動物達の住み家であり、活動の場である。特に御嶽鳥類繁殖地、白嶽原始林、竜良山原始林は国指定の天然記念物であり、海神神社社叢、和多都美神社社叢は長崎県天然記念物に指定されている。これ等は植物学的に貴重な山々であり、又動物達の繁殖生息地、冬鳥の渡来地として何時迄も大切に保護されねばならない。

対馬の深い山には人間どものはかり知れない獣や鳥や昆虫達のメルヘンの世界をおもう。そして、自然破壊の声を聞けば、その怖ろしさにゾッとするのである。

近世史料取扱受講の記

――白井　傳――



昨秋、辺隅の島の民俗資料館の庭にある銀杏古樹が、次第に淡く色づき始める頃、玄海を渡った。十月十二日より十六日まで五日間、東京の国立史料館で、第二十七回近世史料取扱講習会に受講するためであった。

初日は午前八時四十五分の開講式で、早速九時より学習院大学名誉教授で、近世史料に就いては当代第一人者である児玉幸多先生より「近世史料概論」の講義を受けた。受講者は、全国各県より資料館関係、東大、京大、広大、早稲田大外各大学の図書館関係其他などから六十名の定員であった。その内九州地区からは六名であった。参集の若い諸友に混って、この様な得難い一道研鑽の機会を与えていただいたことを深く感謝しつつ、児玉先生の深い学識と、精密な各地の近世文書調査に據る、広範な事例を通しての講義を丹念にノートしながら、短い五日間の受講参学であるが、受講生六十名の中で、一番精しくノートを取り、又実習なども誰よりも多く、進んで作業に取り組もう……。この様な深い決意を胸底に掛在しつつ、第一日の初講より、寸時を惜しんで一生懸命に努力した。

各講義は一時間半宛で、午前中二講、昼食一時間を置いて午後四時二十分まで、一日四回の連続講義であった。

第一日目は児玉教授に引続いて、神奈川大教授網野先生の「古代中世史料概論」、全日本博物館学会会長岩崎先生の「史料の保存科学」、筑波大助教授宮田先生の「近世の民俗資料」、第二日は国立史料館藤村先生の「村方史料読解Ⅰ」、神奈川大教授浅井先生の「村方史料読解Ⅱ」、藤村先生の「村方史料読解Ⅰ」、大阪大教授山中先生の「近代史料概論」、第三日は国立史料館大藤先生の「町方史料読解Ⅰ」、国立史料館鶴岡先生の「町方史料読解Ⅱ」、宇佐美国宝修理所長宇佐美先生の「史料の補修」及び「補修実習」、第四日は、国立史料館笠谷先生の「幕藩史料読解Ⅰ」、国立史料館大野先生の「幕藩史料読解Ⅱ」、午後は国立史料館の収蔵庫、各施設の見学による収蔵、管理、保存、研究等の現場研究と、国立史料館の各先生方及び受講生全員の質疑応答、及び各館の状況所感等の座談会であった。第五日は国立史料館原島先生の「史料の整理、管理Ⅰ」連続三時間、午後は国立史料館安沢先生の「史料の整理、管理Ⅱ」で講義を終り、引続いて閉講式が行われた。短い五日間の日程であったが、午前午後と、それぞれ斯道の専門の諸先生より、充実した講義を受け、分秒の余裕も忘れて毎日ノートを取り、実習に取り組んだことは、過去に幾十回と研究会、講習会に参加したその何れよりも充実し、必至懸命の努力に終始した此の会を泌々と回想している。特に「近世史料読解」の研究資料として配布戴いた古文書のコピーは、六十数枚の多くで、「徳川家綱領知朱印状」「徳川吉宗御内書」「老中御書付」「大目付廻状」「庄屋役替取極正文」「東大寺別当前大僧正聖基坊政所下文」等々幕藩史料、町方史料、村方史料其他等の近世古文書読解には、それぞれ字体の違う文書の解読に、夜、旅舎での予習解読、研究に夜を徹したりした。又その道の深い専門家であられる宇佐美先生より、補修修理の実習を受け、紙魚が喰い荒したぼろぼろの「孟子集注巻五、十二」「箋注蒙求校本巻之下五十九」を、自らのりをとき、ピンセットや各種の刷毛を用いて、補修裏打ちを実習したことは、得難い一道の参学であった。今もその時の裏打ち作品を机辺に見つつ、あの折の専念の懐いがなつかしい。

学道寸心抄

しみくへるやれふるぶみのうらうちにのりをしとけばゆふばえにほふ

すめろぎのいますやすくにみやこべにふることぶみをまなぶうれしも

みほりべのかたへにひそとあきくさのたねをしまきていのりきにけり

おほいてふあはくきにそむやすくにのみやにまゐればあさのもやたつ